中原　泉
一枚の写真
33

“富士研”前夜・・・

第１回歯科医師臨床研修指導医ワークショップ（Ⅰ）

「中原先生，富士山を見にいきませんか」

厚生省歯科保健課長の石井拓男に声をかけられた。富士山？！，まことに唐突な誘いに戸惑った…今さら富士山なんて。

１週間後の平成９年（1997）11月30日，私たちは公用車で一路，静岡県裾野市へむかっていた。１時間ほどして足柄のバンガロー風のスナックで，割勘でカレーライスを食べた。石井とは，愛知学院大学の榊原悠紀田郎講座の助教授の頃から顔見知りだったが，話は弾まなかった。

富士山麓を走り，両サイドに高い杉木立がつづく長いスロープをぬけると，別荘のような白い３階建の洋館に横づけになった。会員制をおもわせるリッチ感に，エライ所へきたと息をつめた。ここが，「富士教育研修所」であった。

そこでは，「第24回医学教育者のためのワークショップ」が開催中だった。13時，私たちはそのまま耳慣れない集会に参加した。総勢60余名の医師たちが，丁々発止の討議をくりひろげ，その熱気に圧倒されるばかりだった。

深夜の帰り道，石井と私は腕組みしたまま黙りこんでいた。聞けば，来年は25回目になるので，研修所の玄関前に記念樹を植樹するという。医学部は，24年も前から毎年つづけてきたのだ。それも主催は，文部省，厚生省，日本医学教育学会で，行政が先導する５泊６日におよぶ大 WS である。

車中，私たちは医歯の落差，我彼の差別にうちのめされていた。私はかすれた声で，「我が方も，やらなければいけませんねえ」と呟いた。「そうですね」と，ためらいなく返事がかえってきた。歯学部はどうすべきか，２人の意思は一致していた。

別れぎわに，私は「我が方は臨床研修ですね」と念をおした。私を誘った石井の意図を察していた。当時，私は（財）歯科医療臨床研修振興財団の専務理事をつとめていた。厚生省委託の同財団は，事務所を市ヶ谷の歯科医師会館内に置き，歯科衛生士の試験・免許，臨床研修指導医講習会を事業とした。当時，任意だった歯科医師臨床研修を必修化する気

運が高まっていた。それにはまず，臨床研修指導医の養成が急務だった。

翌日早々に，私は富士教育研修所に電話を入れた。同所は冬季が混むというので，来年12月の空いている日にちを日本歯科大学名で予約した。ひとまず，準備の都合からできるだけ先の３泊４日を確保した。財団の理事会にも諮らない独断専行だったが，キャンセルになれば自腹を切ればよいのだ。私は，なんとしても１年後には歯科 WS を実施する，と腹を決めていた。

とはいえ，私はＷＳに関する知識はなかった。初めて耳にした“タスクフォース（TF）”の意味が分からない。あせって辞書をひくと機動部隊という軍事用語，一般には対策本部，特別捜査班とあった。アイスブレーキング…氷解？，GIO，SBOs，LS，RUNBA，KJ 法，ロールプレイ…。尋ねる人もなく，アメリカの WS 雑誌類を取りよせて，にわか勉強に汗をかいた。

私じしん不得要領なのに，まず，TF の候補を募らねばならない。顔見知りの教授数人に当たるが，臨床研修財団？，TF ？と首をかしげられ，取りつく島もない。本学は，臨床研修委員長の住友雅人が OK した。あとはなんとか拝み倒して，浅井康宏（東京歯科大学），石川富士郎（岩手医科大学），橋本弘一（明海大学），井上 宏（大阪歯科大学），岩久正明（新潟大学），黒崎紀正（東京医科歯科大学），佐藤 廣（日本大学）の急ごしらえのメンバー８名がそろった。

みな錚々たる教授方だが，彼らには WS の教育係が必要だ。石井と私は，日本医学教育学会に出むいて，２名の WS スペシャリストを推薦いただいた。一人は防衛医科大学の田中 勤，もう一人は聖マリアンナ医科大学の斎藤宣彦である。

この両教授を特別顧問にむかえて，新年度の４月２日に第１回実行委員会をひらいた。諸氏は，一様に不安と戸惑いの色を浮かべていた。そこで，第１回歯科医師臨床研修指導医ワークショップを，厚生省と（財）歯科医療臨床研修振興財団の主催により，12月９日から12日まで富士教育研修所において実施すると決めた。対象は，歯科大学・歯学部の臨床研修歯科医の教育指導の管理的立場にある講師以上で，各大学１名とした。

泥縄であったが，この最初の委員会で諸氏は，本 WS の意義と TF の役割を認識した。一気にモチベーションが高まり，一挙に求心力が働いた。あと８ヵ月しかない―WS 経験者は，石川富士郎だけだった。みな年配なのに，医学部での WS に参加することを約し，夏までに全員が WS を体験する。

実行委員会は，毎月１回のペースですすんだ。今回のテーマは，「臨床研修開発」とし，カリキュラム立案と指導技法の習得を目標として，４日間のスケジュールを作成した。

６月24日には，実施要項とスケジュール表を添えて，各大学へ WS 参加案内を送付した。半年間，闇雲に馬車馬のように突っ走って，暗いトンネルをぬけた感じだった。

ところが，参加申し込みの締切８月31日をすぎても，29校のうち１校が足りない。財団事務局が再三催促しても，一向に埒があかない。やむなく石井を煩わし，北海道大学に督促いただいた。早々に教授小口春久が，「私が行きましょう」と手を挙げたと聞いた。これで，総員29名がそろった。

第７回の最終の実行委員会は，開催の２日前にひらき，念入りに最終打合わせを済ませた。OHP を用いて実施プログラムの予行演習をし，４時間，各人が担当のセッションをブラッシュアップした。歯科 WS の先駆けになるという意気込みに燃え，みな一人前の TF の自信にあふれていた。

私は先走って特別顧問の田中に，「ディレクターはベンチをでてはいけません」と痛くたしなめられた。あくまで主役は参加者，という忠言だった。

12月９日の午前中，冬枯れの晴天の富士教育研修所に三々五々集結した。前川 勲が黙々と会議室の準備をしていた。彼は，財団に着任したての事務局長であった。緊張のうちにも，みな明るい広い食堂で昼食をとった。意外に，旨い！…これなら４日間もつ。

そのとき私は，この WS がじきに，“富士研”とよばれる斯界のスティタス・シンボルになるとは，夢にも思わなかった。

（写真：富士教育研修所の１階ロビー。左より中原泉，石井拓男〈現・東京歯科大学短期大学学長〉，住友雅人〈現・日本歯科医学会会長〉）